

昭和二十四年七月二十三日第
三十三年六月十五日發行（每月一回・五
種郵便物認可）

（通第一一一号）

次 目

帰命の一念	近角常觀：(1)
韋提希夫	人…………福島政雄：(7)
橘地翁と私	柳瀬留治：(12)
解白井成允	(19)

慈光

第十卷

第六號

帰命の念(三)

近 角 常 觀

そこで常に申す話なれど、姨捨山の話の肝腎などころが
ここである。子供が親を捨てに行く時に、親を捨てる自分
の善くないといふ事は知つて居るのである。又破れ籠に乗
せられ、黙つて子供の言ふまゝ行く親の優しき事も子供
はよく知つて居るのである。知りながら、子供は矢張り
親を捨てに行くのである。ここであります。我々の日常生活
が皆これである。我々は争ひをする事の善くない事も知
つて居る、人を隔てる事の善くない事も知つて居るのであ
る。「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑す」我々日
常日暮しの善くない事も知らぬではないのである。
さりながらひどい話なるも、その善くないは知つて居り

である。自分は狂人(きみがひ)である、善くならぬ病人(けうにん)であると、斯く思うた事が機(き)の深信(しんしん)が起つたのでも何でもない。狂人(きみがひ)が、自分は狂人(きみがひ)ぢや／＼と言つて居れば、何時までたつても狂人(きみがひ)である。人間は斯うぢや、あゝぢやと言つてゐるだけでは何にもならぬ。

そこで夫れなら狂人(きみがひ)を止めらるか。止めよう、煩惱を離れようとなりて、夫れが止まるかと云ふに止まらぬ。何程止めたいたと力(りき)んで見ても、如何にするも止まぬのである。

かく片方では、善くせねばならぬと思つても善くすることは出来ず、それかと言つて、我々は狂人(きみがひ)でもよい、悪い事をしても、これは皆のする事だと、落着いて居ることも出来ぬのである。

そこでいよ／＼聞かせて貰ふ処は、ここの一処(ひととこりう)である。
どうかと云ふに、そのどうして見ても悪のやまぬ、そのまことならぬ心を見て、よくも／＼呆(あき)れ給はず、そのまこと

ならざることが可哀想であると、この親様の御心ひとつである。二月、三月、四月

無明の大夜をあはれみて、法身の光輪きはもなく
無碍光仏としめしてぞ。安養界ニ ようがん 見けんする。

安養院は景現する

が、遂に塊りくして本願成就の阿弥陀仏と現はれ下された

若一哉、ムニ哉つゝ、一ノ

著し我
仙と成らんに、
十方

て、下十声に至らん。若し生れずば正覚を取らず。彼仏
いまげん
今現に成仏したまへり。當こ知るべし、本尊せし、重願がん

しからず、衆生称念すれば、必

。斯る広大の本願も、そのもとは、このまことならざる

私が可哀想と、さきのさきまで私の心を知り抜いて下され

たがもとのである。

この処を人々にしつかりと頂かねばならぬのである。

私は貴様の性質も、貴様の根性も能く知つて居る、

それが、その貴様が田原想て堪へられぬのぢやと言つて、下されるのである。

卷之二

そこで話が細かくなりますも『歎異鈔』の十三章がこれなのである。十三章に於いては、人間の善惡は、人間の力

それならば人を千人殺して見よ、きっと往生は一定するぞと。唯円坊、聖人の仰せなれば、確に自分は如何なる事でも誓つて出来ると、眞面目にお答へした処に、聖人の仰せは斯うである。其処で唯円坊、おほせにはさふらへども、一人もこの身の器量にてはころしつべしともおぼえずさふらふと、まうされて候ひしかば、……。

私如き者は千人は措いて、一人も殺す事は出来ませぬ、と申上げると、聖人、

さてはいかに、親鸞が云ふことをたがふまじきとはいふぞと。

今まで、如何なる事でもきくと言うたに、何故きかぬか。

されば何故に親鸞が言ふことをば違ふまじとは言つたるぞと。而してこの次であります。

これにて知るべし。何事も心にまかせたることなれば、往生のために千人殺せといはんに、即ち殺すべし。しかれども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり。わが心のよくて殺さぬにはあらず。

そこで聖人、形を改めて仰せられたるには、汝このことを以て考へて見よ。若し心任せになるものなら、往生のため

に千人殺せと言ふの故に、お前はきっと殺すであらう。然

るにお前が一人も殺す事が出来ぬのは何故であるか。殺すべき業縁が無いからである。汝、殺せぬからとて、自分が善人ぢやなど思ひてはならぬ。汝の心が善いから殺せぬのではなく、殺せぬは殺すべき業縁が無いからなのである。また害せじと思ふとも、百人千人を殺すこともあるべしと仰せのさふらひしは、我等が心のよきをばよしとおもひ、あしきをばあしと思ひて、本願の不思議にてたすけ給ふといふことを、知らざることを仰せのさふらひしな

るのである。「さればそくばくの業をもちける身にてりけるを、助けんと思召したちける本願のかたぢけなさよ」

我々は悪道に行くべき地獄一定の業の奴なのである。さればこそ仏は、その業の奴が可哀想で見て居られぬと、この度は仏の大願業力といふ仏の御まことを以て、この者に向つて下さるのである。

だからこの浅間しき我々の業が、大悲本願の大もとなることを頂かねば、本願の有難味は頂けぬ。仏の広大なる思召しは、私にこの業がなければ現はれて下さらぬのである。私がこの業のために日夜苦しんで居る。その業の深いのが可哀想で見捨てられぬと、広大のお慈悲が現れて下されたのであります。

そこでこれを姨捨山の話にもどりてお話すると、自分が斯く親を捨てに行くも業のなしわざである、やむを得ぬと云つて居るのは業任せにして居るのである。其の間は、親を捨つるのは善くない、止めなければならぬと言ひつつ、

実際に止めて居ぬのであります。

これにつき話が色々になりますも、私は先達て石見で、極端なる事を申して來た。何だかせめては／＼の思ひより御恩報謝をするのであるといふと、始めの助かつた一念に

り。云々。

そのかはり、又殺さぬ積りで居ても、思ひがけなく百人千人を殺す場合もあるぞ、これ皆人間の業なるぞと、ここであります。

○

処が、若しこれを聞きぞこなつて、我々の善い悪いは、みな業任せぢやとなるといかぬのである。我々の何事も、

止めようたつて止められぬのが業ぢや、業でさうなるのだから仕方がない、されば業まかせにせよと、なつたら大変である。『歎異鈔』またの御言葉には、

弥陀の五却思惟の願をよく／＼案するに、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思召したちける本願のかた

じけなさよ、と。

この、そくばくの業が、この十三章の業なのである。我々自分が正しい、わが身は一つ角善く出来てる積りで居るのであるも、我々はすべてみなこの業を持つて居り、この業が自分の力で一分一厘左右出来ぬのである。我々のする事なす事、思ふ事、考へる事は、皆この業のために引き廻され、迷はされて居るのである。

而して仏は、我々にその業のある所を御覽下され、その業を持つて居るのが不便ぢや、可哀想ぢや、と言つて下さ

於いて大惡を許して貰ひ、夫れが済んだからこれからはせめては／＼と言つて居るやうで、恰も一遍に百千万円を盜んで置きながら、あとから設ひ一円づつでも入れて行くのが御恩報謝ぢやと言つて居る如く、それでは信心と御恩報謝といふことがまるで別々になつて了つて居る。

私は一遍に百千万円盜む浅間しき者、その浅間しき根性を持つ私が、大悲の親様は哀れ可哀想である、かの人の物を盜むあの根性が哀れ不便ぢやと言つて下さるのである。即ち姨捨山の説話で申せば、我々は親を捨てる不孝者である。然るに親は捨てるのを不足に思はぬ段でなく、捨てられながら、その不幸な子供のために、道々、道しるべをして下さるのである。捨てられながら、子供は、あとでどうして帰る積りかと、大悲の涙を以て眺めて下さるのである。其の間、子供は、親は實に優しき者、子供の為に黙つて言ふやうにして居られる、とは思ふものの、親の真意は

が袖を控へて、
さていよ／＼峰に達し、親を捨てゝ帰らうとする時、親が袖を控へて、

「待て。汝が帰りに道に迷はうかと、道々汝のために道するべをして置いてやつたから、道に迷はずに帰れ」と、親から一言云はれた時である。親の真実、親のまことは、子供のために捨てられて下さる位の事に非ず、こち

らがそのまことならざる心もて向ふをば、親はさきに能く知つて、そのまことならざる思ひが、暫くも可哀想で見て居られぬと言つて下さるのである。この親捨ての私のために道々、道しるべをして下されるのである。

○

今弥陀の五劫思惟の御本願といふがこれであります。若し私の、この業の深い事が無ければ、五劫思惟の御本願は無いのである。若し私共、悪い心が取れ、煩惱が止められるものなら、兆載永劫の御苦勞は無いのである。

然るに我々は、この如何にしても、仕て見やう無き處を御覽下されて、夫れが可哀想でならぬと、これより五劫永劫の御苦勞が現はれ、斯くしてここに親が待ちかねて居るぞと、これが本願招換の勅命なのである。

で、いよ／＼となり、親より私の心を言ひ當てられ、「その我を捨てる汝の心根が不便な故、親は汝のために道しるべをして置いてやつた程に、間違ひ無く帰れ」と言はれた時はどうであるか。

あゝ今迄、長々すまぬ／＼と思ひながらも、親は道するべなどして、まだあとから帰る積りかと、あとから／＼踏みにちつて来たのであるが、あゝ實に間違ひであつた、あゝ親は斯る私のために、それ程に思うて居て下されたので

あつたか。長々御心配かけて實に済まなかつた、となるのである。若し私はこの悪い心、浅間しき根性が無かりせば、そもそも仏が五劫永劫の御苦勞をして下されるべき訳がないのである。

全体この信心といふ事が、頂きたい者は頂けよ、頂き度く無い者は頂かなくともよいと云ふ位の事ならば仏がそこまでの御苦勞して下さる事は無いのである。

仏は我々が今現に生死罪惡の大海上に沈没して居る。その様を御覽下さるもの故、その者を一人も餘さず救はねばならぬ。それなればこそ、態々長の御苦勞を下され、遂に正覚成就して、我是その者を救ふ親なるぞと、名告りをお挙げ下さつたのである。

しかしに我々、この慈悲を頂かぬは、長の御苦勞を無にして居るばかりで無く、親を踏みつけて居るのである。然るに親は、踏みつけられても構はぬが、どうか、この心丈は頂きくれよと言はれる。

この親の御親切のために、今迄踏みつけて居た自分が、心底より謝り果てた時が、一念帰命である。すると今までの如く、私が悪いための御たすけぢや、悪い者を見捨てて下さらぬのぢや、ではない。今までかくまでの御恩召とは思つて居なかつたが、これ程広大の仰せであつたか、これを今迄頂かなかつたは、實に長々申しわけがなかつたと、

自分の悪が一分一厘の未練も無く分り、今日今時まで、長々の間違ひで御座りましたと、茲に初めて吾が身の悪しさ

が知らせて貰へるのであります。其處で聖人は、これを『信巻』に善導大師の御文をお引用なされてのたまはく

深信とは即ちこれ深く信ずるの心なり。亦二種あり。一つには決定して深く自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して、出離の縁あることなしと信す。二つには決定して深く、彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を攝受して疑ひなく慮りなく、彼の願力に乘じて定めて往生を得と信す。

と。私はこの頃つくづくとこの味ひを頂かせて貰ひ、深く喜び居る事であります。

終り

題虎石の解説

聚墨生

耽々として病床に侍る。

たま／＼寂に遇うて忽ち哀嘆す。
遙に遠く、東山を望みて

十月二日、遙山

この詩は近角真觀様から、洞爺丸遭難の頃に頂いた、常觀先生の詩であります。遙山と云ふ号を用ひられたことが珍らしいと皆様が申されます。これは、疊鬱大師の終焉の地が遙山寺であり、入滅が六十七歳でありますので、常觀先生六十七歳の御頃、そのことを深く御感じになつて居られたことと想ひます。常音先生の六十七歳になられた時の日誌に「昭和廿四年一月一日」

自分もいよく鬱大師往生の六十七歳を迎へる事になつた。故兄上が頻りに詩に述べられた事を思ふこと切である」とあります。

詩の大意は「聖人が常に愛讐された虎石があつた。最後の御病床に侍つて、看護し申してゐたが、念佛の息絶へ終られる、忽ち哀嘆したと伝へられる。そこで今もなほ東山の聖人の御墓に虎石も共に葬られてゐるが、万年の後までも祖廟を護り続けることであらう。自分もすでに六十七、しかも病余の身、虎石と共にやがて祖廟を護らせて頂くことであらう」の思召かと存じます。

題虎石
遙山
虎石護祖廟
宝山

韋提希夫人

福島政雄

さて韋提希夫人の問題になりますのであります。皆様始終お聞きになつて韋提希夫人はどんな方とお思ひになつて居りますか。

私が金子先生のお書きになつてゐるものを見んで居りました時と覚えますが、韋提布夫人といふ方はもともと非常に賢い方であると、かう云つておいでになつた様であります。それはあんなに頻婆娑羅王が獄中に閉ぢこめられておいでになる。その時に韋提希夫人が、観無量寿經の初めにありますやうに、身体を淨めて麁蜜さちみつでありますか、麦の粉を蜜でねつたやうなものであります。それを身体に塗つて、そして瓔珞えいらく、その瓔珞といふのはどんな瓔珞か知りませんのでありますけれど、瓔珞に葡萄の漿を入れて、それで何喰はぬ顔をして獄中に入つて行つて、頻婆娑羅王にそぞの瓔珞を勧め、葡萄の漿を差し上げて養つてあけられた。それだから三七日を過ぎても頻婆娑羅王はすこしも元気お

「釈尊は何故に提婆達多といふ人を親類に持たれたのであります。私は何故にこんな阿闍世と云ふやうなひどい子を産んだのでせう」

と愚痴の限りをつくす。これはまあ私共の愚痴といふものは皆さうであります。何とも變りやうのないものを、何故自分はこんな風になつたものかといふことを繰り返すものが、私共の愚痴であります。私なども始終さう云ふ風な愚痴の多い人間であります。韋提希夫人が釈尊の前にそんなにして愚痴の限りを言つて居られる。さうすると何もない時には非常に賢明な夫人と見えたところの韋提希夫人が、いよいよ事が起つて、ひどい目に逢はされると云ふと愚痴の本性が出てきた。そして韋提希夫人といふ方も、矢張り愚痴の一女性である。かう云ふことになりますかと思ふのであります。

「この婆娑といふものが熟々つくづくいになりました。何とか楽しい世界、いい世界に生れたいと思ひます。どうかその善い世界、立派な世界をお示し下さい」

ところへずに居られるとある、あゝ云ふところを見ますと、そんな工夫をせられてゐる、成程賢い、賢明な夫人であつたなといふことも考へられます。そこを金子先生は多分仰言つて居られるのであります。

ところが今度は阿闍世王からひどい目に逢ふ。もうすこ

しで殺されようとして、耆婆大臣などの諫めがあつて、やつと助かつて、然しあの奥深い宮殿の中に閉ぢこめられてしまつたと、かうなりますといふと、あの時の韋提希夫人はもう全く愚痴の人であります。そしてどうか釈尊のお弟子がいらつしやつて、私を慰めて下さるやうにと一心に思つておいでになると、お弟子ばかりでなく釈尊もまたそこにお出でになるといふことになつて居りますが、そのお出でになつた釈尊の前で韋提希夫人は御承知の通りに大声を挙げて泣かれるといふことになつて居ります。それから自分の瓔珞をひきちぎつて、自分も地に倒れて、泣きながら、

に沢山の立派な世界をお示しになることになりますが、そこにこの私が何時も非常な感じを持つてゐますところは、ここであります。

韋提希夫人が愚痴の限りをつくしてゐる頃に、釈尊は微笑したまうた。この微笑であります。それは非常に味ひの深いやうに、これは外の仏典の中にも、例の有名な拈華微笑といふこともありますやうに、微笑といふことが大事なことになつてゐるやうであります。

そして私自身、自分のことにして考へて見ましても、前に申し上げたか知れませんか、本当に自分は微笑むことが出来るかと思つてみますと、どうもこの本当の微笑などは私なんか出来ないらしいと思つてゐるのであります。

△ 釈尊の愚痴の韋提希夫人を前に見て、世尊すなはちほゝゑみたまふ、といふこの微笑は、韋提希夫人をすつかり世尊の胸の中に撰めいれ給うて、微笑したまうた。何とも言へない微笑である。つまりその微笑といふものが韋提希夫人の救濟といふことと直接な関係がある。つまりその釈尊の微笑に韋提希夫人の救濟といふものはもう約束されてあると、かう云ふ風の感じを持ちますから、この微笑したまふといふ所は非常にこの面白いといつては悪いかも知れませんが、非常に大事なところであると思ふのであります。

なる。ところがここはどうあります。沢山の世界がス
ーと、光台現国と云つてあるやうであります。草提希夫
人の眼の前に立派な、結構な世界が沢山現れて見えたと、
こうなつてあります。ここは非常に不思議なところであ
りますけれど、どうであります。

世尊が眉間から光を放ちたまふ。その光の中に現れると
云ふのでありますからこれはどうであります。釈尊の今
微笑み給ふといふそのお心持といふものが、何となく、今
泣いてゐるところの草提希夫人にかよふと、さうすると、
先づ草提希夫人は釈尊の慈悲と智慧との力を感ぜられる。
釈尊の慈悲と智慧との光が草提希夫人の心の奥底を照した
まふと、さうすると、その慈悲と智慧の光といふものが、
草提希夫人に非常に広大な結構な美しい世界といふものを
感ぜしめられたものである。

目の前に沢山の国々が現れて見えたとかう云うてあります
すけれど、実は釈尊の心持が徹つたところに、実は草提
希夫人の心にさう云ふ風の感じ、沢山の美しい世界が見え
るといふさういふ感じにわき立つて来ると、かういふ
ところなのであります。

そして御承知の通り草提希夫人にお呼びかけになりま
して「汝今知るや否や。阿弥陀仏ここを去ること遠からず。
これは始終私共の拝聴する釈尊の御言葉で、非常に有難い

お言葉であるといふことを感ずるものであります。「阿
弥陀仏ここを去ること遠からず」。草提希夫人のもうこの
世の中は熟々いやであると云ふ様なことを言つてゐる、そ
の草提希夫人に、阿弥陀仏ここを去ること遠からず、もう
あなたのその苦しんでゐる心の底に阿弥陀仏のまこととい
ふものが徹つてゐるのでありますよ、といふことを仰言する
のと私には受取れるのであります。

草提希夫人は愚痴をならべて自覚せずに居りますけれど
も、釈尊の方はもう草提希夫人の心の底に徹つてゐるもの
をチャンと見抜いていらつしやる。そして阿弥陀仏ここを
去ること遠からず、その苦しみの中に阿弥陀仏の光明がと
どいてゐますよといふことを仰言ると、これが草提希夫人
の心がひらけて来るところの最初の芽生えを釈尊がお示し
になつてゐるところであらう、ぢやからもうこの時に草提
希夫人は救はれる第一歩にいつてゐる。この婆娑世界はい
やだ／＼といつてゐる、そこにもうさう云ふ風な阿弥陀仏
の光が徹つてゐる。釈尊のお慈悲の心持といふものがひび
いてゐる、かういふ非常にこのいいところであります。
私共たつてさうであります、一番苦しんで藻掻いてゐ
る。その藻掻いてゐる苦しみのどん底に仏のまことの光を
うけるのであります。うけてゐて初め感ぜずにあるのであ
ります。うけてゐて自分が受けたるといふことも自分が

悲、仏のまことといふものが、草提希夫人に徹底してきた
ことを草提希夫人御自身が自覺されたといふ、そこがこの
ところであると、かういふ風に説かれてゐると私は受けて
居りますのであります。

ここでいよいよ草提希夫人の心持がひらけた。ひらけた
といふことはどういふことでありますかと云ふと、それま
での草提希夫人は、こんないやな婆娑はない、提婆達多だ
つて釈尊の従弟の方であるのに、それが阿闍世をそそのか
して、そしてあんなにしてひどいこととなつた。また自分
は阿闍世といふ子を産んでゐる。こんな苦しいいやな婆娑
は早く抜け出して、樂な世界に行きたいといふことであり
ましたが、ここで草提希夫人の心持が転ずるところ、そ
のいやぢやぐと云つてゐたところのこの婆娑世界に落着
く心がここに拓けてくる。

前には何故阿闍世と云ふいやな子を産んだのだらう、と
言つて居られたところの草提希夫人が、ここに心が拓けて
参りますといふと、さうすると、苦しみの中に飽くまで
も、阿闍世の心が転じて来るやうにと、苦しみの中に落着
いて阿闍世に向はれる。今迄はこんないやな子供はないと思
つて居られた草提希夫人が、阿闍世が何とかして、この
自分が頂いたところの仏のまことを頂くやうに、自分はこ
の苦しみの婆娑世界にこのまゝにとどまつて居つて何とか

して、阿闍世の心が転じて来る時をまちたい、そのためには自分はこの婆娑にとどまつて、どういふ苦しみに遭つても、すこしも苦しみをかまはぬ、いとはないと、さういふ風な心持、章提希夫人にこの時ひらけて来た、かういふ風にまあ私は受け取つて居るのであります。

ぢやから、観無量寿經といふお經は、この点において、章提希夫人の大転換であります。そして転換しましたところの章提希夫人は、これからその苦しみの王宮の中にあつて、苦しみの中に落着いて、母親としてなすべきことを尽して行かれる、かういふ風になつた。実際この信心の心持といふものはさういふ處でせうかと思ふのであります。曇鸞大師の御言葉であります、極樂世界といふものはそこに行つて非常に樂な目をする、樂しい目にあふ、だから極樂世界に往生したいと考へてゐる人間は往生しない、淨土往生はしないといふことを曇鸞大師がハツキリとのべてをられます。この大師の御言葉を親鸞聖人はあの御本書、教行信証の中に二ヶ所ほど同じ御言葉を引いておいでになります。ぢやから親鸞聖人御自身としても、そのところは深く感じておいでになるのであります。

その「空中に住立したまふ」とある。空中といふことであります、よくお經を拝読しますと空中から声が聞えたとか、ここでは空中に立つておいでになる、この空中とい

ふことがよく出てくるのであります、私はこの空中といふことをこのやうに味うて居りますがどうであります。空中から声が聞えたといふのはその人の心の奥深くにさういふ声がひびく。ここでもさうであります。章提希夫人の前に無量寿仏が空中にとどまつておいでになるといふのは、実は章提希夫人の心の奥深く仏様のお慈悲がかうひびいてあるといふ、さういふことをこの空中に、と、かういふ風に云つてあると、かう思ひます。

あとで出て参ります阿闍世王、いよ／＼この釈尊の所に行かうかといふ前に空中の声がきこえるとあります。空中から声がきこえて「お前は菩薩の云ふことをきけよ。仏世尊以外にお前を救うて下さる方はない」と云ふ声が空中から聞えてくる。そこで阿闍世は吃驚して「空中の声は誰の声か」とかう云ひますと「我は汝の父、頻婆娑羅なり」とかう云はれる。

あれが涅槃經、あそこのところ、大変大事なところと思ふのであります、そのお父さんであるところの頻婆娑羅王の生前の声が、その時初めて阿闍世王の心にひびいてくるのであります。心の奥深くひびいてきたといふのを「空中に声あり」と、かう云ふ風にお經では書かれてあるとかう受けとりますと私には解るのであります。さう云ふことであらうと云ふ風に味つて居ります。

(続く)

念佛往生を 橘 地 龜 次 郎 翁 と 私 (二)

柳瀬留治

五

橋地さんの夫人は元小学校の先生で、翁との間に二人の娘さんがあり、長女の春子さんは長じて海軍教授の堀口さんに嫁ぎ、七人の子持ちで、もう一人の次女昌子さんは歯科医の田島さんに嫁がれ、大戦中橋地さんと共に松任に移られてゐる。松任に移つて十年、橋地さんは殆ど臥した儘なので、その看護に老夫人も倒れられ、二人を見る昌子さんは大変であつた事と思はれる。私は松任に翁を訪ねたのは三回の様に記憶する。初めはまだ恩給停止中の頃で橋地さんは苦しい御様子で、春子さんの御主人も追放中で苦労して居られたのではないかと思はれた。その後翁は大変弱つて居られるところで昨年一月訪ねた。その時は思の外の元氣で、朝早くから柳瀬君は未だか／＼と、幾度か駅へ迎へにやられた由であつた。病室に入ると、臥つた儘ではあつたが、「やあ柳瀬君」といつた調子で「あゝよく来て

くれた」と大層な喜びで、手まねきで酒を出させられ、何でも床から起きかへるのだといふ。大男の不自由な体を起すのに、私までこけそうになつて起した。私にも飲めと呉め、御自身も飲まうといふので何杯か上られた。顔を見るとき老ひ瘦れてはゐるものゝ、昔ながらの八字鬚にさも嬉しさうに、例の如く目を細くして話し出される。私が前に慈光誌に載せた如き信仰上の荒っぽい話になつた。我々の如何に拘らず、上には厳として仏の大願業力が在し、親鸞聖人の声今猶響いて居り、近角常觀常音両師身は死せりと雖も幽冥界より我々の心にじかに響いてくる、偉大なる願力には寸分の増減はない。といつた話になつて、橋地翁は病軀を忘れ、顔面に赫灼たる輝きを見せるのであつた。

私に泊れと云はれるが、時間一つぱいなので辞去した。屹度この信仰の力でまだ／＼生きられ、老病も取り戻せるものと思つてゐた。人間は心で体を引き立てゝ行ける。とこ

るがくたびれた筋肉神経、殊に臟器には限度がある。人間にはそした肉体といふ宿命の制約を何ともすることの出来ない憐れなものである。

六

私は間歇熱病のやうに思ひ立つと弓も弾も排して一途に進む。その中に忘れてしまつた如くに他の事をやつてゐる。駆け出したと思へば、いつか夢中に道草を食ふ放牧の馬のやうだ。橋地翁はあれから体の元気を取り戻したことゝ許り思つて忘れてゐた。するとこんな手紙が来た。

春子さんの一信

柳瀬さん、私は八月廿九日から松任の父の所へ看護のお手伝ひに参り、今月七日舞鶴へ帰るところです。貴方が、私の父のことを忘れず、一月に尋ねて下さつたことを父や妹から度々伺ひ、昔忘れずよく来て下されたと感謝して居ります。ところで私の所へ和歌山の辛島さんといふ方から手紙で父にあひたい、石川県のどこか知らせて欲しい。家内が東京の求道会館で橋地様に懇意な導きを頂きましたので、雑誌慈光で橋地さんのことを伺ひ是非お目にかかりたい。とのこと、文理大で主人と一緒に方らしいです。父に申しても、前と違ひ意識も殆ど消えかけて居て判りません。何を話してももうわかりません。匙で一口宛口へ入れてあける食事をおいしさうに食べるだけです。遙々参りま

もう長くはないでせうと申されました。幾つになつても親と別れるのは淋しいものです。特に子煩惱の父でしたから……九月三十日

×

うむさうか。今度は駄目かも知れない、誠にお氣の毒である。病人橋地さんも病に苦しんであることであらう。又看護の人々も屋も夜もそれを見まもつてある苦しみは一応の事ではあるまい。之は氣の毒だが何ともならない。私が行つてそのまま見ても、病人を疲らすだけで、信仰を語つたとて病氣の中聞き取る余裕もあるまい。たゞ私の友情上の満足に過ぎない。だから念佛は平生業成と申すのだ。前以て行ける中に行き、語れる時に語り合つたのだ。相手は橋地翁の事である。病苦にあつては唸り三昧で行く外はない。傍で唸りを聞く、それは念佛の唸りかも知れない。生きるも死ぬも全く願力の自然にお任せ申す他はない。誠に「凡夫の計ふべき所に非ず」である。

×

十一月二日夜、電報が来た。見ると、「カメジロウシス三ヒソウギ、キッジ」とある。遂に橋地翁は死んだのだ。あゝ行きたいには行きたい。然し俺は今、百円しか持たぬ、そのうち妻が帰るであらうと端座念佛をしてゐた。妻が帰つて來た。早速電報を示す。黙つて暫く見つめてゐる

してもさして嬉しさうでもなく、帰る時もトロ／＼眠りかけて居ります。その情ない様子に何度も泣きましたか。私が帰つても妹夫婦私の息子二人居てくれるのですまだもと思つて、ふり切るやうにして帰りました。私のことに全力を盡してくれた父を知つてゐる貴方はお察し下さることゝ存じます。妹と二人で、この両親をどうして上げやうもない悲しさに手を取りあつて泣きました。この頃始めて人生の無常を知らされました。

汽車の中で 堀口 春子

昌子さんの一信

……父も三月末より頭が上らず寝たきりで食事も食べさせて上げて、話を五分位しか出来ません。体も全然自分で動かず、柳瀬さんがおいで下された頃と全く違ひます。

……九月七日

×

いつて会ひたいが、保育園はどうにか休めるとしても旅費がない。借りると又後の祟りが癌となる。何その中仏力の冥加によつて持ち直すであらうと思つてみると又、

昌子さんの一信

……父は此頃全く食欲なく、今は口も利けずかすかにうなづく丈です。……十日程前「こんどは死ぬ様な気がする。どうもお世話になつた」と申しました。今朝、医者も

許りである。「どうだらう、行つてもたゞ恩義に報いたいといふ心の満足と家族を幾分慰め得る位であるが」と、妻の判断を待つてみると、「時間が無理かも知らぬが行くならどうにか搔き集めて間に合せますが」といふ。

「さあ、私は世間的な儀礼の意で翁の葬儀に参列したくない。私と翁は心と心の間柄なのだ。無理をしてまでは意に反すると思ふ。それで先程から行かずに念佛申してゐようと思つてゐた処なんだ!」「それも尤ものことですね」といふのである。その実心は行きたくてたまらない。無理に繋ぎ止め、おし鎮めてゐるのである。事は時間の問題である終列車の発車刻限が過ぎると諦めもつくだらうと思つて寝た。ところが翌日も翌々日も胸に物の詰つた思ひである。人生思ふにまかせて行けるならば、生きてゐたいと思ふ病人が死なずに居られる筈である。我が体、我が心全くいはかりでござります。親としてはこの上ない良い父でしたが、晩年は自分の不自由な為もあり死に直面してのあせ

春子さんの一信

生前の道の友として深い御厚情かたじけなくお礼申し上げます。又この度の五百の悼歌を拝見し涙を新にして居ります。私にはこの気持を何とお答へに表しやうもなく歎悼はがゆいばかりでござります。親としてはこの上ない良い父でしたが、晩年は自分の不自由な為もあり死に直面してのあせ

りもあつたでせう。看護の人達（昌子達）にどうにも扱ひにくいむつかしいお爺さんとのみ映つたやうで、私は幸か不幸か遠方に居ました為、良い面ばかりの思出に終始して居りましたが、それ丈に心ゆくばかりの看護はさせてもらへず、親不幸に終つた事が心残りでございます。亡くなる前々夜は松任に着き一睡もせず其の夜は看りに終りました。呼吸が苦しく口を結ぶことも出来ず一息一息真剣でした。私は父の手を握り其一息一息見つめて、ガーゼで口を潤すばかりで朝を迎へました。次の朝医者を呼びましたが、注射も駄目との事、今日の風邪持たぬかも知れぬといつて帰られました。私は「お父さん舞鶴から来ました、判る？」と云いましたら、「わかる」とかすかにうなづいて呉れました。然しもう最後としては何とも物足りない。もう少し言ひたい、きかせて貰ひ度い、と焦りました。

風も苦しい息をついて病と戦つてゐる様子、其夜私の次男が聴診器で脈と呼吸を見てゐましたがしつかりしてゐるとの事、私と藤原の叔父、看護婦、忠雄、信雄と交代で見つめてゐる丈、朝の四時につつと思が一時止り、皆ハツと驚き、田島を呼びにやり、二階にある者は起し、さてはと思つてみると又息は前より烈しく吹き返し、十一月二日の朝を迎へ、藤原の叔父が仏壇に御飯を供へんを打ちました。父はぶる／＼と左手を動かしはつきり目を開きまし

た。如何にも見へるといった顔です。「お父さん、春子ですか」と言へば「よく来て呉れたな」と申します。父の甥の保さんが顔を出すとおおと言ふような顔をして「たのむ」と申します。「誰を」と申すと「おばあさんを」と申すのです。

この一年親身も及ばぬ看護をして呉れた西井さんも判ると言ひ、昌子もわかると言ひます。叔父は「そんなに今死んで行く人に話をするな」といはれましたけれど私は一生懸命話し「お母さんを心配しないで下さい」と言ひました。苦しい／＼と言ひながらも最後迄真剣に病と戦つた父でした。牛乳を上げれば美味しさうに吸うて呉れ、水を飲ませればゴク／＼と飲んで呉れ、私も思ひ置く事もありませんでした。……栄子さんといふ人が何十年振りに尋ねて來てくれ、お菓子と見舞の封筒を下された。それを見せた処がはつきり読んで封筒を裏返して見るのに驚きました。……昌子が駅までその人を見送つてゐる間にとう／＼息は止りました。全く不思議でした。……最後迄母を氣つかつて亡くなりました。（中略）各地から同信の方々の熱の溢れたお悔みやお志には全く今更信仰の同志の心に感じさせられました。今頃は常観先生常音先生の所で肉体の苦しみをすてゝ安樂に送つてゐて呉れることを私は信じてゐます。不幸にして私は求めて得られなかつた信仰で

した。或は真剣に求めず現世の迷ひを追つて一生を送る様な気が致します。子供を／＼と七人の子供を育てる事に半生を過し宗教はそつちのけの淋しい生活でした。今子供達が一人前になりかゝり、次第に親を離れて行くやうになつて急に淋しくなつて居ります。

十一月二十五日 堀口春子

そして終りにこの手紙は父の亡くなつてから私の書いた第一号です、とあつた。

その返事を書かうとすると無秩序に思ひが湧いて来て、

落ち付いて書く時間もない。朝は早く出る、夜は疲れる。

何とか暫く暇を見付けてと、手紙をポケットに入れた。が繰り返すのは同様な日である。そのうちに風邪に臥してしまつた。それで漸く返事を書く機会を得た。

でも書くことは、慰めと愚痴、人情といった世間あり來りのものは厭である。今は亡き翁が春子さんに死の別れに臨み言ひたかつたらう事、それが私の言ふべき眼目である。それをこゝに管々しく言つても仕方がない。眞面目だけを伝へようと思つた。

要は、父上に死なれて、遣り方ないお心持、誰に云つてみても何ともして貰へるものでなく、一人々々が持つて生れ背負つて行く外ない運命、それは業と云ふものです。歎異録に「そくばくの業を持ちける身にてありけるを助けんと覺けを伝へようと思つた。

父の亡くなる二十日程前でした。父が大変息づかひが荒く、熱もあり苦しむので、急いで医者を呼びました。医師はわざと父の気を紛すやうに笑ひながら「おちいさんは近角先生のお念仏をあれ程信仰して居られるから死ぬのは一寸も恐しくないでせう」と申されました。その時父はいきなり立つ様に「人間が死を恐れぬ者が誰ありますか、信仰とはそんなものでない」と強く言ひ切りました。

その後お隣の奥様も来られて「おちいさん、心配しないでゆつくりした気持であると直りますよ」と慰めて下さいました。父は怒りに顔を歪め「貴女は人の事だから心配しないでと言はれるが、私は自分の事にそんな呑気なこと言つて居られぬ」と怒鳴り、奥様も驚いて帰られ、私は申訳なく困り、一方父の悲愴な様子に胸が迫り涙に咽びまし

た。身動きも出来ぬ衰弱した父の、どこからあの強い力の言葉が出たことか、死ぬるまで一步も妥協することなく信仰に生きた人でした。死後お医者様も「本当のこと云ふ人だ」と感心して居られました。

父の最後の一年は氣の毒でした。母は身も心も疲れはてゝ床につく様になり、私達姉妹が同じ家に居ぬ為、人様のお世話にならねばならず、それが一番私の苦勞でした。あのやかましやの厳格な父の気に入る人のある筈がありません。近所の人、親類の人、家政婦、いろいろお願ひしましたが、気に入らず直ぐ帰ってしまいます。父の言ふ事は何時も「明日から誰も居らんでもよい。お前は私に付添を探してくれようと思つて居ようが、人間として出来る丈しか出来ぬものだ、お前の出来る丈すればよい。お前はどれ丈私の為にしてやりたくても、十分私の気に入る様に出来ない、それを私はよく承知して、思ふ様出来ぬ事を憐んで下さる。私には可愛想に思つて下さる仏があるから心配せんと申すのです。しかし放つて置けず、その勝手我儘ではどうなることかと心配したり口論もしました。处が全く不思議にも一年程前より二十才の娘さんが父の世話をする様になり、この人が絶対に父の言ふ通りにし、口答へ一つせず、親身の及ばぬ介抱するのに、見舞の客も皆驚き、父も勿論気に入り、この人により喜んで死んで行きまし

う。

讀だと思つた。
肉体に宿る心には性格がある。肉体のある限り性格はあまり変わらない。唯念佛に救はれ、自我の根切れをさして頂き、息をつがして頂く喜びだけです。私とて肉体とその命に執着してどんなに死の際に苦しむか知らないのです。死んだ先も全く判りません。真くら闇です。唯々そのくら闇に墮ちて行く私を憐み共に行つてやらうとの慈悲一つが光なのです。誠に歎異鉢に云はれる「親鸞におきては、たゞ念佛して弥陀にたすべきらすべしと、よきひとのおほせをかうぶりて、信するほかに別の仔細なきなり。

念佛はまことに淨土にうまるゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさぶらぶ。です。他に全く道のない自分なんです。共に行つてやらうとのこの慈悲一つあれば、たとへだまされても悔いる所がないのです。こちらは飽くまで闇です。闇を照らして下される慈悲の光明一つが闇の私の力なんです。法然上人、親鸞聖人更に近角画先生近くは翁の力とされた一道の光明がこの念佛なんです。

又病床で苦しんでゐる父に「おじいさん、苦しいでせう。一人で淋しいでせう。」と申さずに居れません。体が利かず寝た切りですから。父はその時「誰のせいでもない。みんな私の業病なんだ。だから可愛想だと仏様が一緒にゐて下されるのだ。お前の思ふやうに大して淋しくもないよ」と申すのです。私の淋しく悲しい心が却つて父から慰められるのでした。

正信偈私解(三)

白井成允

三界の衆生を吾がひとりごとみそなはす 一子地に在りて、釈迦牟尼仏は、その衆生をすべて吾れと等しき覺りの境に到らしめようと願ひたまひ仇きたまうた。其の御願ひを聞き、御仇きを受けて、仏の道に醒めた者は、同じく道を世に伝へて、一切の衆生を生死の迷ひの境から常樂の覚

りの境に到らしめることに努めた。釈迦牟尼の滅を示したまひしより二千五百年、此の如き努力が不斷に受け継ぎ、為され來つて今日に及んだのであるが、其の世々國々に亘りて為された弘法伝教の流れの中に、私共にとりて最も親しく恵み深くたうとくありがたいものは、親鸞聖人の教であ

る。聖人は、釈迦牟尼佛から御自身に流れ来つた仏道の真隨の伝統を敬ひ思ひて、淨土真宗を頤し、「教行信証」を組織したまうた。「正信偈」は其の行巻を結ぶ六十行百二十句の偈文であつて、聖人が仏道の眞髓を証さしめられたまうた伝統の流れをしみぐと讃歎せられたものである。

私共は此の偈文の中に於いて淨土真宗を知らしめられ、真宗の伝統を仰がしめられる。そして其は即ち人生の理想と當に歩むべき道とを明かしめられる一大事に他ならぬ。此の如き偈文の作者は如何なる人であられたか。私は今此の偈の私解に入らうとして作者親鸞聖人の御生涯を偲びまるらせる。

われらの祖師親鸞聖人は、高倉天皇の承安三年（仏紀一五六八西暦一一七三）藤原氏の支族日野家に降誕し、龜山天皇の弘長二年（仏紀一七四七西暦一二六二）

御齡九十歳、世に知られず寂かに入滅したまうた。此の約一世紀、特に其の前半は、内乱相続、日本民族の歴史を通じて稀なる苦惱の時代であつた。祖師十三歳の時、稚き安徳天皇の平家の一族に奉ぜられて西海に沈ませらるゝあり、四十九歳の時、御鳥羽・土御門・順徳三上皇の各遠く海を超えて遷らせらるゝあり、此の如き皇室の御苦惱はそのまま全国民の苦惱の象徴であられた。其の苦惱は、平家物語がいみじく伝へるように、生死の境を超えしめる仏智

を以て朝に仕へた勝れた人々も出でられた系統であるけれども、時代のきびしい渦の中に没落してあられた如く、加ふるに祖聖は幼少の日既に母君を喪ひ父君とも別れたまはねばならなかつた如くである。其の孤独の悲しみは老年の日の言葉の中にも偲ばしめられる。九歳の時出家して比叡に登られたが、其の御情の中には、此の悲しみがひそかに潜んでをられたであらう。其は、青雲の志を世間に伸ばす縁の絶たれたに由りて山に登りて之を獲んとする類のもとは遙かに異つてをられたであらう。其処には、後に内室惠信尼がいみじくも記してをられるように既に生死出づべき道へのひたすらなる尋ねが、沈み流れてをられたであらう。其の尋ねは、山に在りて修めしめられた仏道によりて漸く明らかに醒めしめられた。實に仏道は、釈迦牟尼の遺教を奉けつゝ、唯此の尋ねを真実に歩ましめ成就せしめる所以に他ならないのであるから。けれどもひとたび此の尋ねに醒める時其はやがて如何に道を修めても猶且明かし難く答へ難き尋ねである事に氣著き苦しまざるを得ない。此の苦しみを懷いて、曾て南都にも学はれたであらう。南都の諸大寺は北嶺叡山と共に日本仏教を荷ひ伝へてをられたのであるから、真摯に道を修めんとする学徒が其処を訪ふことは疑はれる要しない。其の如き日に次の如き事があらせられたとの伝説がある。之を私は、後の日の六角

に撮められ、淨土の光明に照らされて救はねばならぬものであった。祖師の後半生の時代は、幸にして仏の教を受け得た北条泰時・時頼の執權の下に、暫く小康を保つたけれども、其の晩年には既に蒙古の使におびやかされはじめた。文永の役は祖聖滅後十二年の事であつた。

因みに、祖聖の恩師法然上人が専修念佛に帰したまうたのは祖聖三歳の時、選択本願念佛集を著されたのは祖聖二十六歳の時の事であり、同じく三十五歳の時、上人は土佐に流され、四十歳の時、八十歳にして入滅せられた。

更に広く当時の仏教界を眺めると、榮西禪師は祖聖十九歳の時、宋より帰りて臨済禪を伝へ、四十三歳の時入滅、解脱上人は祖聖と同年に誕生、華嚴を伝へて六十歳の時入滅、解脫上人は律を修めて祖聖の四十一歳の時入滅、道元禪師は祖聖の五十五歳の時宋より帰りて曹洞禪を伝へ、八十歳の時、五十四歳にて入滅、同じ年に日蓮上人法華宗を開き、八十八歳の時に立正安國論を著はしてをられる。祖師親鸞聖人は此の如き時代に出で在した。此の時代は、われらの祖先の最も厳しい暗黒の時代であったが、而も其の間に禪師道元を生み、祖聖親鸞を生むことによりて、永遠に世界歴史を照らす法燈を点じ得た偉大なる時代となつたのである。

祖聖の降誕せられた日野家は藤原氏の支流であり、文学

堂参籠の事及び晩年の太子奉讃の歌等に照らしみて寧ろ眞実を伝へるものとして、信する。

其は、十九歳の秋、穢長の聖徳太子の御廟に参籠して太子から次の如き告勅を承けたまうた、と言ふ。言はく、

「我三尊化塵沙界 日域大乘相應地 諦聽諦聽我教令 汝母根心十餘歲 命終速入清淨土 善信善信真菩薩。」

此の告命はひたすらに生死出づべき道を尋ねて獲る能はざる青年の胸に徹する響きを発する。

叡山に於いて祖聖は「堂僧」を勤めてをられた。堂僧とは、僧として正規の学行を修める「学生」でもなく、学生に仕へて雑用に從ふ「堂衆」でもなく、常行堂にありて数日の不斷念佛を修める者を謂ふ由である。当時の叡山は、伝教大師の精神からは遠く離れ、学生は名利に競ひ、堂衆は僧兵に墮ち、たゞ堂僧のみが比較的に清く道を修め得る位にあつたと云はれる。祖聖が此の位に在られた事は、没落した貴族の孤児として然らしめられたのか又は自ら選んで然うなられたのか、知る由もないけれども、いづれにしても是れ日本仏教史の上の大きい幸慶と云はねばならぬ。名利擾乱の巷に在りながら此の青年僧はひとり嚴かに仏道を尋ね修めた——たゞ生死を離れ仏の覚を身に証さうと願うて。

穢長に太子の告命を承けてからの十年、十九歳から廿九

歲に至る十年、是れまさしく人の生涯を決定する若き生命のだぎりたつ時、生命を挙げての厳しい願いが如何にしても達せられないのに、命根ははやくも尽きようとしてゐる。「爰につらつら出要を窺うて此の思惟を作さく、定水を凝らすと雖も識浪しきりに動き、心月を観ずと雖も妄雲なほ覆ふ。而るに一息追がざれば千載に長く往く、云々」といふ恐れに駆られて、「迺ち近くは根本中堂の本尊に対し、遠くは枝末諸方の靈窟に詣でて、解脱の経路を祈り、真実の知識を求む」と存覚上人が歎徳文に述べてをられるのは、まさしく此の時の真相であらう。

其の尋ねの末の消息を惠信尼は次の如く想ひおこして報じてをられる。

「山を出でて六角堂に百日籠らせ給て後世を祈らせ給けるに、九十五日の晩、聖徳太子の文を結びて示現にあづからんずる縁（へ上人？）に会ひまいらせんと尋ねまいらせて、法然上人に会ひまいらせて、又六角堂に百日籠らせ給て候けるやうに、又百ヶ日、降るにも照るにも如何なる大事（風？）にもまいりてありしに、たゞ後世の事は善き人にも悪しきにも同じやうに生死出づべき道をばたゞ一筋に仰せられ候しをうけ給はり定めて候しかば、上人のわたらせ給はん處には、人は如何にも申せ、たとひ惡道にわたら

せ給べしと申とも、世々生々にも迷ひければこそありけめとまで思ひまいらする身なればと、様々に人の申候し時も仰せ候しなり。」

此は祖聖の御往生の報を得て、懷かしい数々の追憶を記して、内室惠信尼公が御娘覚信尼公に寄せられた長い書簡の最初の一節である。そして此には次の端書が附けられてある。

「この文を殿の比叡の山に堂僧つとめておはしましけるが、山を出でて六角堂に百日籠らせ給て後世の事祈り申させ給ける九十五日の晩の御示現の文なり。御覽候へとて書き記して候。」

此の六角堂参籠の九十五日の晩に聖徳太子の文を結びて示現にあづからせたまうたといふ、其の文は、惠信尼公にとりても特に感銘深く淨書せられたものであつたらうが、既に失はれて確かには知られ得ない。然し其は文松子伝聖徳太子廟窟偈として伝へられる四句五行の偈文であらうと推測せられる。（私は昔近角常觀先生から之を承つた、後に山田文昭師の研究、佐々木円梁兄の著等にも之が肯はれてゐるのを知つた。）言はく

「大慈大悲本誓願 懇念衆生如一子 是故方面從西方誕生片州興正法 我身救世觀世音 定慧契女大勢至生育我身大悲母 西方教主弥陀尊 真如真實本一体

に、「山城のおたぎの柏山に入り、」「六角の精舎を造りてぞ、閻浮檀金三寸の救世觀音大菩薩、安置せしめたまひげり。」「日本国にはこの御寺、仏法最初の処なり。」「太子の勅命帰敬して六角の御寺を信受す、皇宮の有情もろともに恭敬尊重せしむべし。」是れ祖聖が六角堂とその觀世音菩薩に寄せたまふ感懷の流露である。

「救世觀音大菩薩 聖德皇と示現して
多くのごとくすてずして阿摩のごとくそひたまふ。」
大慈救世聖德皇 父のごとくにおはします
大悲救世觀世音 母のごとくにおはします。」

是れ祖聖が觀音菩薩と聖徳太子と対して懷きたまう不斷不尽の情の響である。今、生命のゆくへも知らぬ若き魂は、稚児の父母に憑る如く、たゞ一筋に六角堂の救世菩薩に憑り聖徳太子の示現を仰いだ。正に是れ生死を決する祈願であった。

（五月十九日）

一体現三同一身 片域化縁亦已尽 還帰西方我淨土
為度末世諸有情 父母所生血肉身 遺留勝地此廟窟
三骨一廟三尊位 過去七仏法輪處 大乘相應功德地
一度參詣離惡趣 決定往生極樂界。」

聖徳太子は救世觀世音菩薩の化身として西方淨土から日本に來り現はれたまうのだといふ信仰は、中世に於いて遍く承けられてゐた所で、祖聖の御晩年にくりかへし歌ひたまうた太子奉讚歌の中にもしみじみと伝へ顯されてゐる。其は青年の頃に懷かれた此の廟窟偈の深い感銘を語つてゐるものゝようである。而して此は亦上に掲げた磯長の御廟で受けられた告命とも相照応する内容のものであることを明らかである。

叡山に勤苦すること二十年。仏法の諸の学行を重ねて而も生死出づべき道は獲られず、迅くも命根の尽きねばならぬ期の迫り来るに臨んで、祖聖の若き魂は唯六角堂の救世觀音の尊前に百日参籠して、如何にして後世の助からんずる縁に会ひまるらせ得べきかと問ふより他無かつた。自の行の力は崩れ去る、仰ぎ懲るは唯觀音菩薩の慈悲救済のみ、その菩薩の御意は聖徳太子によりて示現せられてゐる。祖聖が六角堂の救世觀世音の尊前にぬかづいて太子の廟窟偈を念誦したまうたのは仏法力の自然であつた。

聖徳太子は、日本國に仏法を弘め有情を救はんがため

編集後記

御案内

で手術をされた時、一週間ばかり先生が看護された時の歌で、敏朗さんも感激深く凝視されてゐた。

麦秋も終りやうやく蛙声の嫌んな頃となりました。

先日、熱田の佐藤市太郎さんを見舞ひました。かねて中風で養生して居られましたが、昨今は失語症となられ、筆を持たれても、三字か四字しか書けぬ由、奥さんから承りました。数年来深く仏法を喜んで来られましたが、今では一声の念仏も申すことの出来ぬ御病状であります。不自由なそのお姿に接して、第十八願の衆生往生の本願に一声の称名をも往因として求めましまさぬみむねを仰ぎ、且は執持鈔の一行業疎なりとて疑ふべからず、経乃至一念の文あり、仏語に虚妄なし、本願あに誤りあらんや」を事新しく教へられました。

五月廿日の夕刻、神戸の池山敏朗さんが突然来庵され、早速、奈良の淨教寺様から頂いた池山先生の御軸、「久遠このかた子故の廻向わたし一人をかた思ひ」を掲げ、敏朗さんの学生時代、東京

△「帰命の一念」とは信生活の始めであり終りであります。誠に懇切に御説き下さいました。獅子が鹿をたほす時も全力を振ふりますが、近角先生の何事にも全力を尽くされての徳音に触れ、事あたらしく感佩申しました。

△「草提希夫人」の福島先生の御原稿は、いよ／＼夫人の心の開ける点を中心におきました。「淨業機あらはれて禊迦草提をして安養を選ばしめ給へり」と聖人が淨土往生の大先達として渴仰されたところであります。

△「橘地翁と私」の柳瀬さんの御原稿はこれで終りました。翁の二女、石川県石川郡松任町古城十二、田島昌子様から懇ろな御葉書を頂きました。あすの夜は照りますものと知りながら入るさの月のおしくもあるかな△「正信偈私解」は、しばらく聖人のことについてお述べ下さる由であります。お忙しい中を月々速達でおどけ頂いて居ります。

毎月廿四日午前、午后。市内昭和区
小桜町、教西寺。法話会
市電、御器所通下車。桜花学園東北側。

定価一部	二十円(送共)
半 年	百二十円(送共)
一 年	二百四十円(送共)
名古屋市南区駄上町二ノ三八	
名古屋市千種区千種町馬走二八	
印 刷 人 本 田 政 雄	
編集・発行人 花 田 正 夫	
發 行 所 慈 光 社	
振替口座名古屋一〇四七〇番	